

『楚辞』九章涉江篇の形式について：押韻と朗誦リズムの関係の検討

野田，雄史
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9659>

出版情報：中国文学論集. 25, pp.17-34, 1996-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『楚辭』九章涉江篇の形式について

——押韻と朗誦リズムの關係の検討——

野 田 雄 史

はじめに

一般に『楚辭』は「兮」字によってリズムを決定している、と言われている。確かに現存する楚辭の文を見ると、ある一定の法則に従って「兮」字が使われており、そのような印象を受ける。しかしそのみに言及し、ただ「兮」字が楚辭の根幹であってリズムを決めているとだけ言って、果して問題が全て解決されるものであるか？

「兮」字の使い方方に多少不規則な点が見られる九章の涉江篇は、その音韻を仔細に検討してみると、ただ偶數句末で押韻するだけではなく、かなり複雑で特殊な押韻をしていることがわかった。この九章涉江篇の押韻法は詩のリズムにどのような影響を與えているのだろうか。拙稿では、九章涉江篇を中心に、押韻と詩のリズムとの關係について考察してみたい。

一、竹治貞夫氏による、楚辭の形式上の分類。

竹治貞夫氏の『楚辭研究』（風間書房 1978）によれば、楚辭諸篇のうち散文系の「卜居」「漁父」以外の作品は、形式上次の四つに分けられる。

『楚辭』九章涉江篇の形式について（野田）

古體・天問型

〈楚辭 天問〉

曰遂古之初

誰傳道之

上下未形

何由考察之

新體・九歌型

〈楚辭 九歌 東皇太一〉

吉日兮辰良

穆將愉兮上皇

撫長劍兮玉珥

璆鏘鳴兮琳琅

新體・橘頌型

〈楚辭 九章 橘頌〉

后皇嘉樹

橘徠服兮

受命不遷

生南國兮

新體・離騷型

〈楚辭 離騷〉

帝高陽之苗裔兮

朕皇考曰伯庸

攝提貞于孟陬兮

このうち新體の三つは、句の字數や「兮」字の使用法などから分類したものであり、毎句中に「兮」字を挟むものを「九歌型」、偶數句末に「兮」字を置くものを「橋頌型」、奇數句末に「兮」字を置くものを「離騷型」と呼ぶ。一見して氣付くように、「離騷型」の二句を併せて一句と見做せば、形式上は「九歌型」と同じになるとも言えるが、竹治氏はこの考え方を、押韻法の相違や一句の字數の面から、「あまりに形式的な見方」と批判している。⁽¹⁾筆者は必ずしも「形式的な見方」とは思わないのであるが、この説の當否については一旦おき、拙稿の中でも「離騷型」・「九歌型」という分類法を使用することとする。

二、九章諸篇の押韻法の詳細な検討

では次に九章諸篇の押韻法について検討していくことにしたい。⁽²⁾

一口に九章と言うが、その中に收められている九篇の詩は様々な性格の詩の寄せ集めであり、ひとしなみに見ることは出来ない。そこでそれぞれの詩篇が押韻上どのような特徴を持つか調べてみた。

まず特徴として氣付くのは、惜往日・悲回風が一つの韻目を十韻以上にわたって長く使うことがある点である。

これは勿論、詩自體が長い（惜往日⁽⁸⁸⁾句・悲回風⁽¹⁰⁾句）ことにも起因するが、同じ位の長さの惜誦（⁽⁸⁸⁾句）・哀郢（⁽⁸⁸⁾句）などでは連続してもせいぜい四韻であり、このようなことはない。⁽³⁾

二番目に、次に擧げるように奇數句末同士で、偶數句末とは別の韻目の字で押韻するものがある。

九章 惜誦

忠何罪以遇罰兮 亦非余心之所志

行不羣以嶺越兮 又衆兆之所咍

○…月韻

△…之韻

『楚辭』九章涉江篇の形式について（野田）

九章 哀郢

發郢都而去閭兮 荒忽其焉極 ○…魚韻
 楫齊揚以容與兮 哀見君而不再得 △…職韻

更には次に擧げられるように、句末でなく句中に押韻字を持つものもある。

九章 哀郢

將運舟而下浮兮 上洞庭而下江 ○…幽韻
 去終古之所居兮 今逍遙而來東 △…東韻 □…魚韻

ところでこの「句中韻」であるが、同じ韻目に屬する字が二つ以上あったからといって、それを機械的に全て押韻と見做すと、偶然同じ韻目字が使われただけで押韻の意圖がない部分を排除することが出来ず、形式の理解に支障を來してゐる。そこで、同じ韻を持つ句は對等であり、かつその韻はリズム的に等價値の場所に出現する筈である、という考えで句中韻を選別した。この考えにもとづくと、次に擧げる思美人の例は、同じ韻目に屬する字があちこちに出てはくるが、それらの配置には規則性が見られず、句末以外で押韻しているとは思えない。

九章 思美人

蹇蹇之煩冤兮 陷滯而不發 ○…元韻
 申旦以舒中情兮 志沈菀而莫達 △…月韻

一方、先の哀郢の例は、一句目と三句目とが同じ構造をしていて、しかもその同じ位置に同じ韻目の字が現われ、韻を踏むことに意味があると考えられるので、これを句中韻と見做すのである。⁽⁴⁾

次に、押韻字が二句目に現れず四句を隔てて現れる場合もある。この「隔四句韻」と思われるものの例は九章の中では次に挙げる二つのみである。⁽⁵⁾

九章 惜誦

紛逢尤以離謗兮 謗不可釋
 情沈抑而不達兮 又蔽而莫之白
 心鬱邑余侘傺兮 又莫察余之中情
 固煩言不可結而諡兮 願陳志而無路

○…鐸韻
 △…耕韻

九章 抽思 A

茲歷情以陳辭兮 蓀詳囀而不聞
 固切人之不媚兮 衆果以我爲患
 初吾所陳之耿著兮 豈至今其庸亡
 何毒樂之謗謗兮 願蓀美之可完

○…文韻
 △…元韻
 □…陽韻

さて、これらの押韻上の特徴がどのような傾向で出現するか見てみると、それぞれの特徴は相互に関連性なく現れるようである。岡村繁氏の論文によれば、九章諸篇は

一期 抽思 A

二期 哀郢

三期 涉江 抽思 B 懷沙

四期 惜誦 思美人 惜往日 悲回風

という順番で制作されていたらしいのだが、これに照らしてみても、一韻を長く使う惜往日・悲回風がいずれも

『楚辭』九章涉江篇の形式について (野田)

最も新しい時期に配置されている以外は関連性が見出せない。

ということは、句中韻・奇數句末韻や隔四句韻などといった現象は、九章諸篇の中では普遍的な現象であると考えていいのではないだろうか。

三、九章涉江篇の押韻形式。

それでは、これらの九章諸篇の押韻形式の實態を踏まえた上で、今回の主要な問題である涉江篇の形式について見てみたい。

今回筆者がこの涉江篇に着目した理由は、この涉江篇が離騷型の句を基本としながら、九歌型の句を八句含む、一見變則的な形式を取っているからである。以下に便宜的にAからJまでの十個の部分に分けて本文を掲げる。

九章 涉江

九歌型は1行に1句、離騷型と橘頌型は1行に2句配した。

<PART A>

余幼好此奇服兮

年既老而不衰

○…徵韻

帶長鋏之陸離兮

冠切雲之崔嵬

○…魚韻

<PART B>

被明月兮佩寶璐

(九)

○…鐸韻

世溷濁而莫余知兮

吾方高馳而不顧

●…魚韻

駕青虬兮騭白螭
吾與重華遊兮瑤之圃
(九) 歌韻

<PART C>

登崑崙兮食玉英
與天地兮同壽
與日月兮同光
哀南夷之莫吾知兮
且余濟乎江湖
(九) 陽韻
(九) 幽韻
(九) 幽韻

<PART D>

乘鄂渚而反顧兮
步余馬兮山阜
邸余車兮方林
欽秋冬之緒風
(九) 冬韻
(九) 幽韻
(九) 侵韻

<PART E>

乘船船余上沅兮
船容與而不進兮
朝發枉渚兮
苟余心其端直兮
齊吳榜以擊汰
淹回水而凝滯
夕宿辰陽
雖僻遠之何傷
(九) 月韻
(九) 陽韻

<PART F>

入澱浦余儻個兮
迷不知吾所如
(九) 魚韻

『楚辭』九章涉江篇の形式について(野田)

深林杳以冥冥兮 爰狄之所居
山峻高以蔽日兮 下幽晦以多雨
霰雪紛其無垠兮 雲霏霏而承宇

<PART G>

哀吾生之無樂兮 幽獨處乎山中
吾不能變心而從俗兮 固將愁苦而終窮

○…魚韻
△…冬韻

<PART H>

□□□□(兮)□□□□
接輿髡首兮 桑扈羸行
忠不必用兮 賢不必以
伍子逢殃兮 比干菹醢

○…陽韻
△…之韻

<PART I>

與前世而皆然兮 吾又何怨乎今之人
余將董道而不豫兮 固將重昏而終身

○…真韻

<PART J>

亂曰

鸞鳥鳳皇 日以遠兮
燕雀烏鵲 巢堂壇兮

○…元韻

露申辛夷 死林薄兮

△…鐸韻

腥臊竝御 芳不得薄兮

陰陽易位 時不當兮

□…陽韻

懷信侘傺 忽乎吾將行兮

このうち(九)印をつけた八句が、句中に「兮」字を挟む九歌型の句になる。竹治氏の『楚辭研究』によると、聞一多『楚辭校補』に基いて、この八句のうち最初の六句を惜誦篇の亂の混入とし、後の二句を一句目の末のみに「兮」字を置く校訂をする、という解釋をしている。しかし、惜誦篇の亂がこのような形で涉江篇のこの箇所に入るといふのは、その經緯を考えにくいので、本論文では、この一見不統一な涉江篇の形式に對しても、そのままの形で解釋を試みたい。

では、それぞれの部分について押韻の形式を考えてみよう。AからJまでのうち形式上も押韻上も問題のない部分、〈PART A〉〈PART E〉〈PART I〉〈PART J〉である。また、〈PART B〉は三句しか現存していないが、句の構造からも内容からも明らかにもう一句補うことが出来、一般的な偶數句末韻が想定されるので、今回は問題にしない。その他の部分について、一つづつ検討していくことにする。

まず、〈PART B〉と〈PART C〉は、いずれも九歌型三句と離騷型二句との合計五句から成る。そして、〈PART B〉の魚韻と鐸韻とを、他の例に倣って押韻と見做すと、いずれも一・三・五句で韻を踏むことになる。この形は餘り一般的な形式だとは思えない。前に一句脱落している、という考えもあるかもしれないが、例えば一句目を「兮」字の後ろで二句に分けてみても、六句になって二・四・六句で押韻し、偶數句末韻の一般的な姿になる。

次に〈PART D〉は、離騷型二句と九歌型二句の四句から成っている。二句末の「風」が冬韻、四句末の「林」が侵韻で、一見押韻しないようにも見えるが、「風」は、王力「楚辭韻讀」では侵韻に分類しており、もともと侵韻起源の文字であるらしいので、押韻すると見做して問題はないであろう。そこでそれぞれの句の構造を突き合わせて考えると、一句目の「而」、二句目の「之」、三・四句目の「兮」はい

『楚辭』九章涉江篇の形式について(野田)

いずれも同じ役割を果しており、九歌型の句と離騷型の句は、ここでは對等の價值を持って扱われていると考えてよい。

ここまでで、「九歌型の句の混入」と言われる現象は全て出てきたが、いずれも離騷型の他の句と折り合いよく韻を踏んでいるようである。

では残りの二つのパートについて考察したい。

△PART Ⅱは八句四韻から成る。しかしその中は四句・四句で分かれるのではない。三句目と五句目、四句目と六句目とがそれぞれ似た構造を持ち、かつ三句目と五句目の句中で韻を踏むことから、真ん中の四句がひとかたまりになり、二句・四句・二句という組み立てになっていることがわかる。

△PART Ⅲはそれに続く部分で、四句から成る。普通の偶數句末韻であるが、二句目の「處」と四句目の「苦」は句中の同じ位置で同じ韻目の字を使っている。兩句の構造がさほど似ていないので偶然同じ韻目の字を使っただけなのかもしれない。しかし一つ氣になるのは、この韻目が直前の△PART Ⅱの八句四韻の韻目と同じである、という点である。それまで八句にわたって二句ごとに四回踏んできた韻と同じ韻目の字が、また次の二句目の朗誦の切れ目で出現したとしたら、それなりのリズム効果が生まれよう。しかも更に次の二句目でも同じ位置に同じ韻目の字が出現するのであれば、尚更である。従って、朗誦の際には諧和する音として認識されたはずだし、それを前提とした解釋をすべきではなからうか。

四、涉江篇の表現技巧と朗誦。

以上見てきたことをもとに、以下にこの涉江篇を形式面から分析してみる。

まず一つ目は、この一篇の中には離騷型の句と九歌型の句が混在していると言われてはいるが、それらは互いにリズムを交錯させながら押韻し、二種の句の混在した小グループを構成している。相互の比重は、九歌型一句が離騷型一句に相當するもの(△PART Ⅱ)の「駕青虬兮驂白螭」「吾與重華遊兮瑤之圃」△PART Ⅲの「與天地兮同壽」「與日

月兮同光」〈PAR1 D〉の「歩余馬兮山阜」「邸余車兮方林」、あるいは二句に相當するもの（〈PAR1 B〉の「被明月兮佩寶璫」〈PAR1 C〉の「登崑崙兮食玉英」）など様々ある。また、一口に九歌型といっても、押韻から判断される實質的な一句の形は、「兮」字を句末に持つもの（〈PAR1 B〉の「被明月兮」〈PAR1 C〉の「登崑崙兮」）・句中に持つもの、どちらもあり、句の長さも三文字から九文字と多種多様である。こう考えてくると、句の中に出現する「兮」字の位置でその句を分類する方法が、この涉江篇に對してどこまで有効性を持つものか疑問に思えてくる。

次に二つ目は、句中韻を踏むが、奇數句末韻は踏まない、という點である。これ以外の、句中韻を踏む「惜誦」「哀郢」は、いずれも奇數句末韻の形式をも持っている。もつともこの奇數末句韻というものは、離騷型二句を一句として考えれば句中韻の一種になるので、それらに區別はないのかもしれない。また、「惜誦」（88句）「哀郢」（本文89句）などに比べて詩自體が短い（本文88句）ためだとも考えられる。

最後に注目したいのは、〈PAR1 E〉の八句の、二句・四句・二句の構造である。八句の中四句をひとまとまりにし、句中韻を使うことでそれを際立たせて主人公の心理描寫を掘り下げる手法は、極めて巧妙かつ有效な技法と言える。この技法をもとに〈PAR1 F〉〈PAR1 G〉を以下のように譯してみたが、中四句の情景描寫を挿入することによって主人公のあてどなくさまようさまが強調され、より悲壯感がただよってくる。

激浦に入って私はさまよい 迷ってしまったって私の行くべき方がわからない

深い林は奥深い 眞つ暗で 猿が住むようなところ

山は険しく高い 日を隠し ふもとは暗く雨ばかり

霞や雪が亂れ舞って果てもなく 雲は垂れ込めて軒に掛かる

我が人生の樂しみのないことを哀しみ ひっそりと獨り住まう 山の中

『楚辭』九章涉江篇の形式について（野田）

私は心を枉げて世間に合せるなどできず、そもそも愁い苦しむ、万事休す

これら特徴的な技巧は、恐らく朗誦されたであろうその實演の場⁽¹⁾で、他と際違った演出効果をもたらしたと考えられる。一句の字數に長短があることは、聴き手にリズム的變化を印象つけて内容の緩急と影響し合い、句中韻を用いることで句同士の密接さを暗示し、二句・四句・二句の構造では、まるで主人公のモノローグを挿入するかのよう⁽²⁾に心理描寫をして、この一篇の敘事詩の主人公の悲劇を演じているのが讀み取れる。

その際に、聴き手の耳に残る響きは、隨所に現れる「兮」字ではなくて、互いに諧和する韻字ではないだろうか。確かに、現存する楚辭の詩の中に規則的に現れる「兮」字は、讀むものにとつて、「如何にも楚辭である」という視覺的な印象を與えている。しかし、當時朗誦されて傳えられた筈の「生の楚辭」においては、むしろともに演奏される樂器や、言葉を載せる旋律にこそ「楚的なもの」を感じたはずだし、押韻字で規定される一句の長さやその連絡、換韻の頻度といった面からこそ内容理解を深めたはずである。この點において、涉江篇は文學的にかなり洗練された技巧を使つて作り上げられた詩篇だと言えよう。

おわりに

筆者は拙稿において、楚辭涉江篇の「兮」字の使い方は必ずしも混亂しておらず、そのまま考えてよいことを論じるとともに、「句中韻」「奇數句末韻」の觀點を持ち込んで分析することで、内容の解釋に變更を迫つたつもりである。

この「句中韻」「奇數句末韻」の觀點は、果して他の九章諸篇、更には楚辭全體に及ぼして考えることが出来るのだろうか？九章の中における涉江篇の位置付けをも考慮しながら今後考察していきたい。

(1) 竹治貞夫 楚辭研究

風間書房 1978

p. 457

離騷の句形を検すると、…(中略)…この句形は屈原が自らその情を抒べ意を達するのに最もふさわしい形式として、創造したものである。それは兮字を中間に挿む九歌型の句から兮字を除いて、その代わりに有義の助字である之・于・以・與・其・而・夫・乎等をうずめ、兮字はただ節奏の役目のみを負わせて奇数句末に附したのである。(注)

(注) 林庚氏は離騷・九歌両型の句を、…(中略)…のごとくに並べ、これらはただ単に字句の長短の差に過ぎずして、本質的には同じ形態のものであるとしている。「詩人屈原及其作品研究」七九頁)しかしながらこれはあまりに形式的な見方であろう。離騷と九歌とでは押韻法が違ふし、また兮字がこのようにすべて句間に挿まれるとすれば、句末に来る橋頌型の兮字は何を意味するのか説明がつかなくなる。且つ一〇数字を一句として誦することは實際上不可能であるから、離騷型の詩句を右のように兮字を中間に挿んだ長句形と見なすことは無意味である。離騷型の兮字は橋頌型の兮字と同じく句末の節奏を表わすものであり、九歌型の兮字は離騷型においてはことごとく有義の助字に替えられていると見るのが妥当である。

(2) 押韻を調べるにあたって参考にしたのは、郭錫良氏の『漢字古音手冊』(北京大學出版社1988)である。これは漢字の上古音・中古音・現代音を對照した字典である。このうち上古音は、諧聲符による分類を軸に、詩經・楚辭等の偶數句末韻から歸納して得られた音の體系を記している。楚辭の押韻を参考にして作られた字典で楚辭の押韻を考えることの危うさがある。清朝の學者や王力等の詩經・楚辭に關する他の研究をも参考にしなから、本末顛倒にならないよう注意深く扱った。それから詩經の音韻體系と楚辭の音韻體系が果たして同じであるか、という點もクリアしないといけないが、共に文言である限りにおいて同じである、との前提のもとで考えて行きたい。

(3)

九章 惜往日

惜往日之曾信兮 受命詔以昭詩

奉先功以照下兮 明法度之嫌疑

○…之韻

『楚辭』九章涉江篇の形式について(野田)

國富強而法立兮 屬貞臣而日嫉
 祕密事之載心兮 雖過失猶弗治
 心純扈而不泄兮 遭讒人而嫉之
 君含怒以待臣兮 不清澈其然否
 蔽晦君之聰明兮 虛惑誤又以欺
 弗參驗以考實兮 遠遷臣而弗思
 信讒諛之溷濁兮 盛氣志而過之
 何貞臣之無辜兮 被離誘而見尤
 慙光景之誠信兮 身幽隱而備之

九章 悲回風

悲回風之搖蕙兮 心冤結而內傷
 物有微而隕性兮 聲有隱而先倡
 夫何彭咸之造思兮 暨志介而不忘
 萬變其情豈可蓋兮 孰虛偽之可長
 鳥獸鳴以號羣兮 草苴比而不芳
 魚鼈鱗以自別兮 蛟龍隱其文章
 故荼齋不同畝兮 蘭茝幽而獨芳
 惟佳人之永都兮 更統世而自矜
 眇遠志之所及兮 憐浮雲之相羊
 介眇志之所惑兮 竊賦詩之所明

九章 惜誦

吾誼先君而後身兮 羌衆人之所仇也

○：陽韻

○：幽韻

專惟君而無他兮 又衆兆之所讎
壹心而不豫兮 羌不可保也
疾親君而無他兮 有招禍之道也

九章 哀郢

○…鐸韻

心嬋媛而傷懷兮 眇不知其所蹠
順風波以從流兮 焉洋洋而爲客
凌陽侯之汜濫兮 忽翱翔之焉薄
心絳結而不解兮 思蹇產而不釋

(4) この「句中韻」という考え方は筆者の創見ではなく、既に錢大昕に次の言及が見られる。

〈錢大昕 十駕齋養新錄卷第十六〉

詩句中有韻

詩三百篇、往往句中有韻。韻不必在句尾也。

(詩經はよく句中に韻を持つ。韻は必ずしも句末にあるわけではない。)

周南「于嗟麟兮」句似無韻。實與章首麟之趾相應。以兩麟字爲韻也。召南「于嗟乎騶虞」，乎與虞韻。秦風「于嗟乎不承權輿」，乎與輿韻。邶風「期我乎桑中，要我乎上宮」，中與宮韻。桑與上亦韻也。邶風「有瀾濟盈，有鷩雉鳴」，盈與鳴韻。瀾與鷩亦韻也。唐風「角枕粲兮，錦衾爛兮」，粲與爛韻。枕與衾亦韻也。大雅「文王曰咨，咨女殷商」，二句似無韻。而王與商、文與殷，皆韻。咨咨亦韻。韻不必在句尾也。魏風「父曰嗟，予子行役」。「母曰嗟，予季行役」。「兄曰嗟，予弟行役」。「子與已」，止韻。季與寐、棄韻。弟與借、死韻。此韻不在句尾之證也。

(これらは韻が必ずしも句末にあるわけではないことの證據である。)

(5) 惜往日篇にも、「職」韻が四句毎に現われる部分があるが、かわりに二句目に現われるのは「之」韻である。この二

『楚辭』九章涉江篇の形式について(野田)

韻は九章の他の詩でも押韻位置に共に出てきており、通用すると思われるので、隔四句韻の例には数えない。

九章 惜往日

雖有西施之美容兮 讒妬入以自代

願陳情以自行兮 得罪過之不意

情冤見之日明兮 如列宿之錯置

乘騏驥而馳騁兮 無轡銜而自載

乘汎汎以下流兮 無舟楫而自備

背法度而心治兮 辟與此其無異

寧溘死而流亡兮 恐禍殃之有再

不畢辭而赴淵兮 惜壅君之不識

○…職韻

●…之韻

(6) 岡村繁「楚辭と屈原 —— ヒーローと作者との分離について ——」

日本中國學會報 18(1966)

詩形を對象にした以上の考察を要約すれば、詮じつめた結論として、「離騷」・「哀郢」の二篇は他の諸篇に比べて最も相近似した詩形を持つ作品であり、しかも最もオリジナルな形態をとどめた古い作品であるらしいことが、だいたい明確になってきた、そしてそのことと共に、最も古い「離騷」・「哀郢」二篇の出現について、やや詩形に新鮮味を加えた「涉江」・「抽思」・「懷沙」の三篇が作られ、さらに遅れて漢賦に近い性質の「惜誦」・「思美人」・「惜往日」・「悲回風」および「九辯」が作りつがれていった——という大まかな制作順序の推定をも、一應ながら合理的な考察過程を踏んで成立させ得たかと思う。

岡村繁 「楚辞文学における「抽思」の位置」

集刊東洋学 16(1966)

以上二つの点からする推論が一応の合理性を持つとすれば、抽思の《本文・少歌》は、離騷のみならず、九章の他の諸篇にも先立つて作られた作品ということになる。

(7) 押韻の位置によって九章を分類すると次のようになる

句中韻・奇數句末韻を全く含まない

抽思A (前半) 惜往日 橘頌

奇數句末韻はあるが句中韻を含まない

抽思B (後半) 懷沙 思美人 悲回風

句中韻を含む

惜誦 涉江 哀郢

(8) <PART B><PART C>再掲

<PART B>

被明月兮

佩寶璐

世溷濁而莫余知兮

吾方高馳而不顧

駕青虬兮驂白螭 吾與重華遊兮瑤之圃

<PART C>

登崑崙兮

食玉英

與天地兮同壽

與日月兮同光

哀南夷之莫吾知兮

旦余濟乎江湖

(9) 聞一多是「楚辭校補」で

乘鄂渚而反顧兮

欸秋冬之緒風

步余馬于山皋兮

邸余車乎方林

『楚辭』九章涉江篇の形式について (野田)

○..鐸韻

●..魚韻

○..陽韻

のように校訂しているが、餘りに恣意的であろう。

(10) 従來は、句中での押韻に注意が拂われていなかったため、この二句・四句・二句の構造に氣付かず、例えば

激浦に入って立ちめぐり

迷うて行く手を見失った

深林は杳として晝もくらく

猿の群の住む處だ

山はけわしく日を蔽い

下は谷くらくして雨が多い

霰雪紛々として限りなく

雲は立ちこめて軒にかかる

のように、四句・四句で捉えて、不十分な理解にとどまっている。

(11) 楚辭がどのように實演されたかについてはいまだ定解がないが、今この涉江篇に關して考えるならば、一句の字數に長短があること、押韻字同士が住々にして離れていることなどから、歌唱されたものではなく、例えば漢書王褒傳の記事のように、何らかの節回しを付けつつ(誦)讀み上げられた(讀)ものである。

* 參考・漢書卷三十四下王褒傳

王褒字子淵、蜀人也。宣帝時修武帝故事、講論六藝羣書、博盡奇異之好、徵能爲楚辭九江被公、召見誦讀、益召高材劉向、張子僑、華龍、柳褒等待詔金馬門。

(付記) 拙稿は、1996年5月に鹿児島純心女子大學で開催された九州中國學會大會の口頭發表に基づくものである。